

江戸の祭礼と開帳

都市における仮設なるものをめぐって

はじめに、この講義のねらい

1) 都市における仮設なるものにも目を向けよう

- ・ 仮設性、一過性 ↔ 恒久性、永久性、永続性
- ・ ソフト（祭礼、開帳、祝祭、博覧会） ↔ ハード（建築、道路、橋梁、河川、鉄道）

2) 江戸から東京への変化は「仮設なるもの」に何をもたらしたかを考えよう

- ・ 都市の変形ばかりでなく、社会の何がどのように変質したか？

初回の鈴木博之先生の講義につなげると

1) 都市のコントロール、無秩序から秩序へ、権力と自然のせめぎ合い

- ・ 建築や空間のみならず、人間（住人の欲望や暴力）に対するコントロール
- ・ 娯楽や祭礼に対するコントロール

↓

「今般市中風俗改り候様と 御趣意ニ有之候処、近来役者共芝居近辺ニ住居致、町家之
もの同様立交り、殊ニ狂言仕組甚だ猥ニ相成、右ニ付而ハ、自然市中江茂風俗押移り、
近来別而野鄙ニ相成、又ハ時々流行之事抔、多くハ芝居より起り候儀ニ付、依而者 御
城下市中ニ差置候而ハ、 御趣意ニ茂相戻り候儀ニ付、勘三郎、羽左衛門狂言座之儀
者、去丑年中猿若町江引移シ被 仰付、木挽町芝居之儀茂、追而類焼致し候歟、普請大
破ニおよび候節ハ、引払申付候旨其節申渡置、其後追々取締方申付候処・・・（後略）」

天保13年（1842）12月6日

（石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』第5巻、岩波書店、1994年、4759文書）

2) 武家地、寺社地、町人地の一元化

- ・ 警察権、裁判権のみならず、居住地、税制（地租）、身分などの一元化
- ・ 国民（臣民）と国家 → 大日本帝国憲法と徴兵制

↓

「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ従ヒ兵役ノ義務ヲ有ス」（第20条）

「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ従ヒ納税ノ義務ヲ有ス」（第21条）

- ・ 祭礼と祝祭 → 氏子と国民

愛宕山からの展望

愛宕山は江戸を見晴らす名所、眼下に大名屋敷が並んでいた。その町並みが、明治維新のあと、にわかに崩れ始める。もし、それを都市景観の崩壊ととらえるならば、それまでの江戸はなぜ調和がとれていたのか。海のように広がる家々の屋根に注目しながら、この問題を考えよう。

- 1) 『江戸名所図会』(ちくま学芸文庫)
- 2) 「17世紀前半の江戸」(『大江戸八百八町』展図録、江戸東京博物館)
- 3) ベアトのパノラマ写真(東京都写真美術館蔵、『幕末・明治の東京』展図録、東京都写真美術館) → 1863年の江戸の景観
- 4) アンベール『幕末日本図絵』(雄松堂、講談社学術文庫)
- 5) 愛宕山下を撮った「横浜写真」(石黒敬章編『明治・大正・昭和 東京写真大集成』新潮社)
- 6) 現代の愛宕山下(2008.5.31 東京タワーより撮影)
- 7) 『熙代勝覧』(ベルリン東洋美術館蔵、小澤弘・小林忠編『活気あふれた江戸の町「熙代勝覧」の日本橋』小学館) → 1803年ごろの江戸の景観
- 8) 広重「する賀てふ」『名所江戸百景』(原信田実『謎解き広重「江戸百」』集英社新書)
- 9) 清親「越後屋」
- 10) 為替バンク三井組(玉井哲雄編『よみがえる明治の東京』角川書店)
- 11) 為替バンク三井組屋上にあった金鯨(堀越三郎『明治初期の洋風建築』丸善)
- 12) 現代の三井本館と三越百貨店

「つくりもの」という造形表現

現代ではほぼ死語と化した、あるいは消極的な意味でしか用いられない「つくりもの(作物、作り物、造物、造り物)」が、江戸時代には積極的に用いられた。それらは仮設的な造形物で、目にする者にしばしば笑いを求め、祭礼や開帳、芝居や見世物の周辺に出現した。それらの催しが終わるとともに姿を消した。大規模なつくりものを禁じる触れが繰り返された。近代に入って、「つくりもの」に取って代わったものが「作品」であり、「芸術作品」や「建築作品」と口にする時、そこには一過性ではなく永続性が期待されている。そして、笑いは封じられる。

- 1) 広重「市中繁栄七夕祭」『名所江戸百景』
- 2) 斎藤月岑『東都歳時記』(平凡社東洋文庫)より七夕
- 3) 『絵本江戸風俗往来』(平凡社東洋文庫)
- 4) 触書(石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』岩波書店)
- 5) 広重「金杉橋芝浦」『名所江戸百景』

- 6) 斎藤月岑『東都歳時記』（東洋文庫）より「顔見世」
- 7) 式亭三馬『戯場訓蒙図彙』（国立劇場調査養成部・芸能調査室）より「二丁町茶屋向側之図、顔見世之光景」
- 8) 姫路総社三ツ山（撮影）→ 20年に一度の祭り、神社前に巨大な山が出現
- 9) 姫路総社三ツ山のつくりもの（兵庫県立歴史博物館蔵）
- 10) 歌舞伎座と積物
- 11) 鎌倉鶴岡八幡宮と積物

天下祭

江戸を代表する祭りが山王権現の山王祭と神田明神の神田祭である。隔年で開催され、ともに江戸城内に入ることが許された。つくりものや人形を飾り立てた山車を曳く行列が出たが、明治時代半ばからはそのスタイルを大きく変え、現在のような神輿中心の祭りになった。

- 1) 広重「糺町一丁目山王祭ねり込」『名所江戸百景』
- 2) 芳員「神田祭出づくし」
- 3) 「天下祭巡行図」（『大江戸八百八町』展図録、江戸東京博物館）
- 4) 『神田明神祭礼絵巻』神田神社蔵
- 5) 遠州横須賀三熊野神社大祭（2008.4.5 撮影）
- 6) 『神田明神祭礼絵巻』龍ヶ崎市歴史民俗資料館蔵より「大江山凱陣」
- 7) 『江戸名所図会』より「大江山凱陣」
- 8) 『芸術新潮』（2007.7）より「大江山凱陣」
- 9) 「神田祭神幸祭巡行図」（2007年版神田祭パンフレット）
- 10) 『朝日新聞』（2007.5.13）より「大江山凱陣」
- 11) 文化資源学会による神田祭附祭復元プロジェクト 2007～2009（2007.5.12 撮影）

開帳

寺社が秘仏や秘宝を公開し、信者による神仏との結縁（けちえん）を図ることが本来の趣旨であるが、現実には、寺社の修造費の募財を目的とすることが多かった。自地で行う居開帳と他所に出張する出開帳がある。江戸では、両国回向院が出開帳のメッカとなった。開帳には、寺社奉行の許可を必要とした。開帳は現代もなお続いているが、宝物館における展示や博物館や美術館における仏教美術展も、新たなスタイルの居開帳／出開帳といえるだろう。先の東京国立博物館における「薬師寺展」が示すように、実際に社寺が潤っている。

- 1) 成田山開帳
- 2) 『江戸名所図会』より回向院
- 3) 現在の回向院
- 4) 『江戸名所図会』より回向院開帳
- 5) 高力猿猴庵『嵯峨靈仏開帳志』（名古屋市博物館蔵）→ 名古屋西蓮寺での出開帳
- 6) JR 車内ポスター「京の冬の旅 ‘07、清涼寺国宝阿弥陀如来像特別公開」
- 7) 『御宝物図絵』法隆寺（東京大学総合図書館蔵）
- 8) 「逆沢瀉威鎧雛形」三の丸尚蔵館蔵（『生まれかわった法隆寺宝物館』東京国立博物館）
- 9) 東京国立博物館法隆寺宝物館

参考文献

祭礼

- 『東京市史稿外篇第四 天下祭』東京市役所、1939
- 『神田明神祭礼絵巻』神田神社社務所、1974
- 『神田明神史考』神田明神史考刊行会、1992
- 黒田日出男『王の身体王の肖像』平凡社、1993
- 『描かれた祭礼』展図録、国立歴史民俗博物館、1994
- 『川越氷川祭礼の展開』展図録、川越市立博物館、1997
- 植木行宣『山・鉾・屋台の祭り』白水社、2001
- 植木行宣・田井竜一編『都市の祭礼ー山・鉾・屋台と囃子』岩田書院、2005
- 都市と祭礼研究会編『天下祭読本』雄山閣、2007

開帳

- 『武江年表』ちくま学芸文庫、
- 比留間尚『江戸の開帳』吉川弘文館、1980
- 北村行遠『近世開帳の研究』名著出版、1989
- 鈴木良明『近世仏教と勸化』岩田書院、1996
- 比留間尚「江戸の開帳」『江戸町人の研究』2、吉川弘文館、1973
- 湯浅隆「近世的開帳の成立と幕府のその政策意図について」『史観』90、1978
- 〃 「江戸における近世的開帳の展開」『史観』99、1979
- 小林計一郎「善光寺出開帳と三都の経済力」『日本歴史』133、1979
- 湯浅隆「江戸における開帳場の構成ー亨和三年善光寺出開帳の事例を中心として」
- 『国立歴史民俗博物館研究報告』11、1986
- 〃 「江戸の開帳における十八世紀後半の変化」同上 33、1991